

「高松式馬鈴薯 ヤンチャ栽培」 実践者検討会開催



▶2018年10月28日
(茨城県牛久市)

2018年10月28日、茨城県牛久市の高松求氏の自宅で今年度の「高松式馬鈴薯ヤンチャ栽培」の表彰と来年に向けた実践者検討会が開催された。

「高松式馬鈴薯ヤンチャ栽培」とは、同氏が20年の長きにわたり、研究を重ねてたどり着いた「高松酵素」を使い、さらに同氏が行なっている独自の培土法を用いた馬鈴薯栽培法のことだ。今年度の取り組みを前に実践者6名には高松氏から高松酵素1袋（1畝分）が提供されていた。それを使うとともに高松式の馬鈴薯栽培法を実践し、1畝の中で株当たり収量が最大だった株を発表するのが今回だった。併せて実践者が来年の栽培に役立てようとする検討会とセットで実施された。

会に先立って高松氏より、今回実践に当たった6名への感謝とともに、次のような挨拶があった。

「これからは地域の方と手を組んで、技術交流や切磋琢磨をしていただきたい。確実においしい物を安定して穫ることを繰り返すことで社会的に評価されれば、日本の農業を変えられるのではないか」

結果では、茨城県阿見町の村上勉氏による株当たり3・30kgが最高だった。これは10a当たりにすると約18・8tにもなる。また、実践者の

誰もが10a換算で4tを超えていた。

北海道の10a当たりの平均収量が3t程度のため、これは驚くべき数字だといえる。あくまで机上の話となるが、高松氏いわく、1株でもそういった物が穫れたということは可能性としてそれが全体にフラットにできれば、たとえ面積が増えてもこれからの収量目標になるという。

今回アドバイザーとして参加した、高松氏の馬鈴薯栽培を長年見てきた東京農工大学名誉教授の塩谷哲夫氏からは以下の解説がなされた。

「高松式の馬鈴薯栽培法は、芽が出るとアッパーで土を被せる。これにより普通の馬鈴薯より葉の厚さと硬さが増す。植物は悪い環境になるとそれを克服する力が働く。

高松式では培土した土を固める。これにより茎が太くなり、葉が硬くなって強く育つ。また、土を固めることで水分が適度にたまり、作物に適した環境を作り、根が二段となったのうえにも張り、収量が上がったのではないか」

九州から参加した実践者の長崎県雲仙市の藤本誠治氏は、地域の春馬鈴薯はマルチ栽培で、今回は高松式で1畝だけ露地で栽培したが、茎葉がマルチの物より長持ちし、全体に小玉傾向だったが驚くほどの収量だったと述べた。

新潟県上越市から参加した実践者の鳴谷幸彦氏は、地力のない土地での栽培だったが、できた物は収量もさることながら、腐った物がなく食味も良かったという。培土のタイミングが少し遅かったため、来年の課題にしたいと話した。

茨城県牛久市の安部真悟氏は、6月10日ぐらいに病気により茎が黄色くなってしまったことを受け、消毒すればもっと収量が上がったと思うと語った。

最後に、高松氏は技術解説を行なった。

「酵素は生き物なので、必要なのは食べ物である有機物と適度な水と空気になる。有機物は堆肥を入れれば良いが、水と空気は適した土壌条件を整えなければ補えない。そのためにはプラウで20・30cm耕起し、作土に空気層を作ることが良い。

高松酵素づくりの作業にあたっての一番のポイントとして、酵素づくりは微生物を扱う作業のため、酒づくりの杜氏のように丁寧な作業をすることが肝心だ」

